

I 第一朗読（イザヤ25章1―9節）

- 1 主よ、あなたはわたしの神
わたしはあなたをあがめ
御名に感謝をささげます。
あなたは驚くべき計画を成就された
遠い昔からの揺るぎない真実をもって。
- 2 あなたは都を石塚とし
城壁のある町を瓦礫の山とし
異邦人の館を都から取り去られた。
永久に都が建て直されることはないであろう。
それゆえ、強い民もあなたを敬い
暴虐な国々の都でも人々はあなたを恐れる。
まことに、あなたは弱い者の咎
苦難に遭う貧しい者の咎
- 3 豪雨を逃れる避け所、暑さを避ける陰となられる。
暴虐な者の勢いは壁をたたく豪雨
乾ききつた地の暑さのようだ。
- 4 あなたは雲の陰が暑さを和らげるように
異邦人の騒ぎを鎮め
暴虐な者たちの歌声を低くされる。
万軍の主はこの山で祝宴を開き
すべての民に良い肉と古い酒を供される。
それは脂肪に富む良い肉とえり抜きの酒。
主はこの山で
- 5 すべての民の顔を包んでいた布と
すべての国を覆っていた布を滅ぼし
死を永久に滅ぼしてください。主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい
御自分の民の恥を地上からぬぐい去ってください。
- 6 これは主が語られたことである。
その日には、人は言う。
見よ、この方こそわたしたちの神。
わたしたちは待ち望んでいた。
- 7 この方がわたしたちを救ってください。
この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。
その救いを祝って喜び躍ろう。

II 第二朗読（フィリピの信徒への手紙4章4―13節）

- 4 主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。5 あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます。6 どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。7 そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。
- 8 終わりに、兄弟たち、すべて真実なこと、すべて気高いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて名譽なことを、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい。9 わたしから学んだこと、受けたこと、わたしについて聞いたこと、見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神はあなたがたと共におられます。
- 10 さて、あなたがたがわたしへの心遣いを、ついにまた表してくれたことを、わたしは主において非常に喜びました。今までは思いはあつても、それを表す機会がなかったのです。11 物欲しさにこう言っているではありません。わたしは、自分の置かれた境遇に満足することを習い覚えたのです。12 貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています。満腹していても、空腹であっても、物が有り余っていても不足していても、いついかなる場合にも対処する秘訣を授かっています。13 わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です。

Ⅲ福音 (マタイ22章1-14節)

1 イエスは、また、たとえを用いて語られた。2「天の国は、ある王が王子のために婚宴を催したのに似ている。3 王は家来たちを送り、婚宴に招いておいた人々を呼ばせたが、来ようとしなかった。4 そこでまた、次のように言って、別の家来たちを使いに出した。『招いておいた人々にこう言いなさい。』「食事の用意が整いました。牛や肥えた家畜を屠って、すっかり用意ができています。さあ、婚宴においでください。』」5しかし、人々はそれを無視し、一人は畑に、一人は商売に出かけ、6 また、他の人々は王の家来たちを捕まえて乱暴し、殺してしまつた。7 そこで、王は怒り、軍隊を送つて、この人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払つた。8 そして、家来たちに言った。『婚宴の用意はできているが、招いておいた人々は、ふさわしくなかった。9 だから、町の大通りに出て、見かけた者はだれでも婚宴に連れて来なさい。』10 そこで、家来たちは通りに出て行き、見かけた人は善人も悪人も皆集めて来たので、婚宴は客でいっぱいになった。11 王が客を見ようと入つて来ると、婚礼の礼服を着ていない者が一人いた。12 王は、『友よ、どうして礼服を着ないでここに入つて来たのか』と言つた。この者が黙つていると、13 王は側近の者たちに言った。『この男の手足を縛つて、外の暗闇にほうり出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。』14 招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない。」

語句の解説

1 節「たとえを用いて」。直訳「たとえによつて」。神殿の境内から商人を追い出したイエスに、「何の権威でこのようなことをしているのか」と問い詰める祭司長や長老たちに、イエスはすでに二つのたとえを語っている。「二人の息子」のたとえ(二二 28-32)と「ぶどう園と農夫」のたとえ(二二 33-

- 1 そして 答えて イエスは 再び 言った たとえによつて 彼らに 言いつつ、
- 2 「比べられた 天の国は ある(人に) 王に、
- 3 その者は おこなつた 婚宴を 彼の息子に。
- 4 そして 彼は遣わした 彼の僕たちを
- 5 呼ぶために 呼ばれていた者たちを 婚宴へ、
- 6 そして 彼らは望んでいなかった 来ることを。
- 7 再び 彼は遣わした 他の 僕たちを 言いつつ、
- 8 『言いなさい 呼ばれていた者たちに、
- 9 「見よ 私の食事を 私は用意し終えた、
- 10 私の牡牛が そして 太らせたものが 屠られていて
- 11 そして すべてが 用意ができています。
- 12 さあ 婚宴へ』
- 13 だが彼らは 無視して 出かけた、
- 14 確かにある者は 自分の畑へ、
- 15 だがある者は 彼の商売へ。
- 16 だが残つた者たちは 捕まえて 彼の僕たちを 虐待した そして 殺した。
- 17 だが王は 怒つた
- 18 そして 送つて 彼の軍隊を 滅ぼした その人殺したちを
- 19 そして 彼らの町に 火を放つた。
- 20 そのとき 彼は言う 彼の僕たちに、
- 21 『確かに婚宴は 用意ができて いる、
- 22 だが呼ばれていた者たちは なかつた ふさわしく、
- 23 それで行きなさい 道々の出口へ、
- 24 そして それほど多くの者を あなたがたが見つける
- 25 呼びなさい 婚宴へ』
- 26 そして 出て行つて その僕たちは 道々へ
- 27 集めた すべての者を ところの 彼らが見つけた、
- 28 悪い者たちをも 善い者たちをも。
- 29 そして 満たされた 婚宴は 食事の席に着く者たちで。
- 30 だが入つて 王は 観察するために 食事の席に着く者たちを
- 31 見た そこに 人間を 身に着けていない者を 婚宴の衣服を、
- 32 そして 彼は言う 彼に、
- 33 『友よ、どうして あなたは入つた ここに 持たずに 婚宴の衣服を』
- 34 だが彼は 沈黙させられた。
- 35 そのとき 王は 言った 仕える者たちに、
- 36 『縛つて 彼の 足を そして 手を
- 37 投げ出せ 彼を 外の闇へ。
- 38 そこに あるだろう 泣くことが そして 歯の軋みが』
- 39 14 なぜなら多く ある 呼ばれる者たちは、
- 40 だが少ない 選ばれる者たちは」。

44)である。今週の福音では、これらに続いて、三番目のたとえを述べている。

2節「ある王」。並行箇所のルカ一四16では「ある人」だが、マタイでは「ある王」となっている。先週の福音でも、マルコやルカが「ある人」と述べるのに対して、マタイは「ある家の主人」に替え、神との関連性を強めていた。しかし、今週の福音でマタイが「ある王」に替えたのは、神との関連を強化するためというよりは、王によって開かれた宴会の盛大さを述べることによって、招待客の反抗のひどさを強調するためかもしれない。▼「婚宴」。婚宴は何日にもわたる喜びの祝宴なので、来るべきメシアによる救いの時の象徴ともなる。▼「王子のために」。直訳「彼の息子に」。王の息子はたとえには登場しないが、彼こそが祝われるべき主人公である。

3節「家来たち」。直訳「彼の僕たち」。ルカの並行箇所は単数形を用いており、しかもマタイのように家来の殺害に触れてはいない。マタイが複数形に替え、殺害をも述べるのは、「家来たち」と旧約の預言者を指しているからだろう。▼「招いておいた人々」。直訳「呼ばれていた者たち」。これは動詞カレオー（呼ぶ）の完了分詞。完了分詞なので、王が家来を遣わす以前に、招待を受けていたことになる。王は前もって招待したうえに、さらに家来を遣わしているのだから、ずいぶんいいねいに振る舞っている。このような丁寧な招待は、客を優遇しようとする好意と、招待の重要さを示すためである。にもかかわらず、招待を拒絶したのだから、客のぶしつけな態度がいつそう目立つ。なお、動詞カレオーは、神の終末的な支配への招きといった意味で使うこともあり、ここでもそういった響きを持つているかも知れない（マタ四21、九13、一テサ二12）。

4節「用意が整いました」。直訳「用意し終えた」。動詞ヘトイマゾー（用意する）の完了形だから、僕を二度目に遣わした時には、食事の用意はすでに終わっている。なお、この語は、救いの歴史を導く神による創造や配慮を表すこともある（ルカ二30―31、ヨハ一四2―3、一コリ二9、ロマ九23、一ペト一5ほか）。

5節「無視し：出かけ」。ルカの並行箇所では、招待客は宴会に出席できない理由を述べてから出かける。しかし、マタイでは何の理由も告げずに出かけてしまい、招待客の無礼さがいつそう強調されている。

6節「他の人々」。直訳「残った者たち」。ルカの並行箇所では、出席を断る三人の招待客はいずれも単数形。しかし、マタイでは、この三番目の客が「他の人々」というように複数形にされている。これは、ルカでは宴会が「ある人による盛大な宴会」とされているのに対して、マタイでは「ある王による婚宴」へと規模が拡大されていることと対応している▼「乱暴し、殺してしまった」。直訳「虐待した。そして殺した」。『虐待した』と直訳した動詞ヒュプリゾーは、名詞ヒュプリス（横柄・傲慢・侮辱）からの派生語。王の家来に対するむごい扱いは、人々の傲慢から生じている。先週の福音にも見られたように、この描写は旧約の預言者が受けた仕打ちを指している。二三34によると、イエスが遣わす「預言者、知者、学者」も同じように殺され、迫害されるとされている。マタイの教会もこのような体験を余儀なくされていたのかも知れない。

7節「王は怒り：焼き払った」。直訳「王は怒った：火を放った」。「怒り」は神の裁きを表す。神の裁きをこのように描く箇所は多く見られるが、特にイザ五24―25との関連が注目される。招待を断った人々が住む町を焼き払うのは、過剰な反応のように思える。しかし、これはたとえを読む視点を終末的な裁きに置いているからだろう。そのために、6節での「他の人々」の仕打ちも、ルカとは違って、王の家来の殺害へと誇張されている。

8節「ふさわしくなかった」。予め「呼ばれていた者たち」は、婚宴への招きを拒絶したので、その優先権は取り消されてしまう。

9節「町の大通り」。直訳「道々の出口」。「道々」も「出口」も複数形。この表現は「道の交差する所」の意味にも取れるが、「道が終わる、町の境界を抜けて外へ出て行く場所」つまり「出口」の意味にも取れる。後者であれば、町の外にいる人々を招いたことになる。最初に招かれた者たちがイスラエルの民を指すなら、「出口」で招かれる人々は異邦人を指すだろう。

11節「婚礼の礼服」。直訳「婚宴の衣服」。この象徴表現が何を意味するかはさまざまに説明される。マ

タイは人の行うべき「義」を強調する傾向があることから考えると(七21・24以下、二五41以下)、義の実行を指しているかも知れない。しかし、それは救いを獲得する条件ではなく、すでに与えられた救いが求める義の業である。だから、ここでの衣服は、救いに招かれたことへの感謝だとも言える。この感謝が義の業を行わせる。」

①構成の解説。

ルカ14章15―24節が今週の福音の並行箇所。両者を比較すると、かなりの違いがあるのが分かる。まず、ルカでは「ある人が催した盛大な宴会」だが、マタイでは「王が王子のために催した婚宴」である。また、このたとえが置かれた文脈も異なっている。ルカでは弟子が取るべき態度を教える7―14節と弟子の条件を教える25節以下の間に挟まれており、弟子はどのように振る舞うべきかを語るたとえになっている。しかし、マタイでは、神殿から商人を追い出したイエスを詰問する祭司長や長老たちに語りかけたたとえとされており(1節の「彼ら」は祭司長や長老たちを表す)、終末的な裁きを視野においたたとえになっている。

第一段落(1―7節)

ルカの並行箇所と比較したとき、宴会に「呼ばれていた者たち」の態度がいつそう悪質なものとして描き出されている。3節で最初の派遣と拒否を書いた後、4節で「再び」僕を遣わしているが、ルカでは僕の派遣は一回で終わっている。しかも、二度目に僕を派遣したとき、「私の食事」「私の牡牛」と述べて、この婚宴の開催者が王であり、素晴らしいご馳走が用意されていることを告げさせているが、このような言葉もルカにはない。しかし、ルカでは招待を断る人が弁明の言葉を述べているのに、マタイでは言い訳もせずに、畑や商売に出かけ、なかには僕を殺す者まで登場させている。このような強調は「招かれていた者たち」の背きの重大さを明らかにし、7節の裁きの必然性を教えるためだと言えよう。

第二段落(8―13節)

宴会に「呼ばれていた者たち」とは、マタイでは、祭司長や長老たちを指す。彼らの優先権は剥奪され、道で出会う「悪い者たち」や「善い者たち」、「すべての者」が婚宴に集められる。この状態は、イエスの死と復活から再臨するまでの間を生きる「教会」を表している。しかし、マタイはルカとは違って、たとえをここで終わらせてはいない。「婚禮の衣服」を着ていない者が「外の闇へ」追い出され、裁かれることが述べられる。たとえを理解する鍵は、「婚禮の衣服」が何を意味するかにある。いろいろな解釈が可能だが、「語句の解説」と「今週の使信から」に書いたように、救いに招かれたことへの感謝に立つて行われる義の業を指すと思われる。

第三段落(14節)

神はいつも人々を宴へと招いているが、すべての人が救いを獲得するとはかぎらない。感謝を忘れず、喜びの中で神の指示に従う者が救いを手にする。

②注目すべき言葉——「結婚する(ガメオー)」と「婚宴(ガモス)」

結婚する(ガメオー)

この動詞は「結婚する・夫婦になる」の意味。新約聖書には28回の用例がある。

共観福音書では、しばしば律法学者とイエスが掟の解釈をめぐる論争をするが、結婚に関する掟もその一つである。その際に、イエスは結婚が人間の取り決めではなく、神の創造の業に由来することを強調し(マコ16以下)、妻を離縁して他の女性を「妻にする」者、離縁された女性を「妻にする」者、夫を離縁して他の男性を「夫にする」者はいずれも姦淫の罪を犯すことになる(十11・12並行)。また、イエスは死者の復活を否定するサドカイ派の思い違いを指摘し、復活した人は「めとることも、嫁ぐこともない」と教える(一一25並行)。洗礼者ヨハネは、ヘロデが兄弟フィリポの妻ヘロディアと「結婚していた」ことを批判して投獄される(六17)。「大宴会」のたとえでは、妻を「迎えた」ばかりの人が、宴会への招待を断る(ルカ一四20)。「妻をめとる」ことは、「食べること」「飲むこと」「嫁ぐこと」と並んで、ノアの

時代に洪水の来襲を知らなかった人々の生き方を表す(マタ二四38)。

パウロがコリント教会に宛てた結婚についての様々な勧告にも、この動詞は多く使われる(1コリ七9・10など)。テモテへの手紙は、結婚の禁止や断食を命じる偽善者の教えに警戒するよう述べ(1テモ四3)、年若いやもめには結婚をすすめる(五11・14)。

名詞形ガモスは「結婚」の意味もあるが(ヘブ一三4)、多くは「婚礼・婚宴」を表す。結婚との関連が薄れ、「祝宴」の意味に近づく用例もある(ルカ二36、一四8)。新約聖書では、婚宴のイメージは、神の救いへの招きとその救いにあずかる人間の喜びを表すために使われる。今週の福音では、「天の国」は王が催す婚宴にとられる(2節以下)。ヨハネ福音書でイエスが最初のしるしを行うのは、カナの婚礼である(ヨハ二1)。「十人のおとめ」のたとえでは、油の用意をしておいた賢いおとめたちだけが、花婿と一緒に「婚宴の席」に入れる(マタ二五10)。黙示録では、「小羊の婚宴」のイメージによって、終わりの時にキリストと結ばれるキリスト者の喜びが表される(黙一九7・9)。

選ばれた(エクレクトス)

動詞エクレゴマイ(選ぶ)の形容詞形で、「選ばれた」を意味する。新約聖書には22回の用例があり、主に人物に使われる。冠詞を伴う用例では、「選ばれた者」の意味で名詞的に使われる。

① 選ばれたものが「最高のもの・最もよいもの」である場合には、選ばれたものに対する評価の側面が強調されて、「卓越した・卓抜な・優れた」の意味になる。パウロがルフォスを「主に結ばれている(選ばれた者)」と呼ぶ例は、おそらくこれに当たる(ロマ一六13)。

② 「えり抜き・精選された」の意味で、選ばれたものに対する評価と選びの側面が共に表される。議員たちは「他人を救ったのだ。もしこの男が神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがいい」と言つて、十字架につけられたイエスをあざ笑う(ルカ二三35)。「生きた石」としての主キリスト(1ペト二4・6)、天使にも使われる(1テモ五21)。

③ 選びの側面が強調される用例では、神から選ばれ、神とのかかわりを持つようになった人間に使われる。今週の福音では、礼服を着ずに婚宴に来た人は外へ投げ出されるといふたとえの結びとして「選ばれる人は少ない」と述べられる(14節)。旧約聖書で「選ばれた人々」と呼ばれるのは、神の民イスラエルである(歴上一六13、詩八九4など)。新約聖書で、この呼び名はキリスト者に使われる(マコ一三20・22・27並行)。神は昼も夜も叫び求めている「選ばれた人々」のために正しい裁きを行う方である(ルカ一八7)。パウロは神によって義とされたキリスト者を、神に「選ばれた人々」と呼ぶ(ロマ八33)。神に「選ばれた人々」としてのキリスト者は、聖なる者、愛されている者なのだから、それにふさわしい生き方を身に着けるべきである(コロ三12)。ペトロの手紙は、小アジア地方に離散するキリスト教会を「選ばれた人々」「選ばれた民」と呼び、異教徒に囲まれて生きる信徒たちを励ます(1ペト一一、二9)。

③「二人の息子」のたとえでは洗礼者ヨハネが登場し、続く「ぶどう園と農夫」のたとえでは「隅の親石」となったイエスが登場した。これらのたとえに続く今週の福音では、イエスの復活と再臨の間を生きる「教会」の姿が描かれているのだろう。

用意ができた(一七節)

「二人の息子」のたとえは、神の救いがイエスの先駆けとしての洗礼者ヨハネによって告げられたことを述べ、「ぶどう園と農夫」のたとえは、神の救いがイエスの死と復活によって実現したことを語っている。そのイエスが救いを完成するために再臨する日がやって来る。今週の福音は、イエスの再臨の日を「王子の婚宴」として描いている。

しかし、婚宴に招かれていた者は来ようとしなかった。二度目に王の僕が遣わされたときも、彼らはこの婚宴を「無視して」仕事に出かける。「招いておいた人々」とは、祭司長や長老たちを指している。神のもたらす救いに価値を見いださない彼らは、王の怒りに触れ、滅ぼされる。

宗教的指導者たちは救いへの優先権を奪われる。彼らは王子の婚宴にあずかる榮譽を見落とし
たからである。王子の婚宴は、直訳にあるように、王が「私の食事」を用意し、「私の牡牛」を
振る舞う宴である。王が与える良いものが用意されているという榮譽を彼らは見落としてしま
った。

婚礼の礼服 (8-14節)

王子の婚宴は「用意ができて」おり、今すぐにも始めることができるが、招待した客はふ
さわしくなかった。王は三度目には、招待した客ではなく、道で出会うすべての人を招くよう
に命じる。「善人も悪人も」すべての人が王子の婚宴に集まる。花婿である王子の登場を待つて
いる人々の姿は、死んで復活したイエスが再び来るのを待つ教会の姿を表しているだろう。こ
の人々の集まりには、「婚礼の礼服」を着ていない人はふさわしくない。

最初の招待客たちは、王が用意した食事の良さを見落としてしまった。道で声をかけられ集
まって来た人々は、王の食事が最高のものであることに気づいた人々。「婚礼の礼服」を着てい
ない人も食事の良さに気づいた一人だが、彼は誰が招いた婚宴であるかを把握できなかった。
招いた王の威光をわきまえていたら、王への敬意を表し、「婚礼の礼服」を身に着けたはず。

教会には「善人も悪人も」含まれている。「悪人」は排除されないが、「婚礼の礼服」を来て
いない人は外の關へ投げ出される。神が私たちに期待することはただ食事の席に参加すること
ではない。神が誰かを知って、宴席に連なることである。礼服は神を知った者の姿を表してい
る。

今週の福音のまとめ

神の救いの歴史は、洗礼者ヨハネからイエスへ、そして教会へと発展して行く。死んで復活し
たイエスの再臨を待ち望む教会は、イエスが与えた救いにふさわしく生きるように求められて
いる。教会は、神の救いにあずかる榮譽に気づき、婚宴を喜び祝う者の集まりである。